昭和の戦争の想い出

工藤幸子（みやぎ台・68歳）

私が結婚したのは昭和十六年の秋でした。丁度二十才の年でした。

其の暮れの十二月十六日だったと思います。日本軍が真珠湾を攻撃して戦争が始りました。次の年の六月頃から、少しづつ町から物が無くなって行きました。

昭和十七・十八年頃には日本にも暗雲が掛り始めたのです。私の所には来ないと信じて居りました。

赤紙がとうとうやって来ました。出征する時主人が「此んな無謀な戦争はすぐに終わるから、戻って住む家が無くてはこまるから東京に頑張って居る様にと」言って海軍に行ってしまいました。

私は一才の女の子と二人で東京の大森に残されてしまいました。此の頃からB29は毎日容赦なくやって来る様になり、毎日毎夜御近所の人達と防空壕に入って泣き出す赤ん坊のオシメを、取替えながら自分も一緒に泣いた事もありました。夜明頃、警報解除になって外に出て見ると、逃げ遅れてゴム人形の様な黒焦げになった人間が道端にころがって居るのを何度か見ました。

そしてやっとやっと終戦を迎えたのです。私は此れで又昔の様な平和がすぐ来ると信じて居りましたが、其れは戦争中よりもっともっと苦しい試練が待って居りました。

軍隊がやって来る、言葉が解らないから女子供はどこか山の方に逃げる様にと隣組からの傳達がありました。私は其の頃私の母が横浜に居りましたので、母の所に身を寄せて居りました。

私は二・三人の人達と保土ケ谷警察に聞きに行きました。署長が「貴女達も大和撫子じゃないか。もしもの時は自分達と一緒に死のうじゃないか」と言われ別に逃げて行く所もないし、もうどうなってもいい様な気持になった事をはっきり覚えて居ります。

子供も三才になりましたが、三つの御祝どころか食べさす事で毎日一生懸命で、毎日の様に買出しに行きました。お嫁に持って行った着物は全部お米と芋に替り「もう若い着物は庫に入らないから、此れからは少し年寄りの物でなければお米は上げられないよ」と言われた事もありました。

保土ケ谷の駅の前に一軒残ったそば屋が有って、さつま芋をむして一糎位に輪切にした三個の芋にカレー汁だけが掛けて有り五亦でした。おひる頃に売出して居り、其の頃は唯一の食堂でした。子供を連れて十五分位歩いて食べに行くのです。家にもどる頃にはお腹がすいてしまうのです。其れでも、そこに行くのがとても楽しみだったと思います。

昭和二十一年の二月十一日（昔の紀元節の日）にずっと音信不通だった主人がもどって来ました。でも東京の空襲で家もなく母の家に身を寄せ

て生きて行かねばならず、又苦労が始りました。

私達の為に気をつかってくれた母も亡くなり、私達は昭和四十年に縁あって此の船橋に住む様になりました。

いろいろの事があり、なんとか安住の地を見つけましたが、五十年には最愛の主人に先立たれ、嫁いだ娘も四十五才になり二人の娘の母になって居ります。

私は今、二人の孫と息子とやさしい嫁と五人で幸せに暮して居ります。静かな夕暮の空を眺めながら、同じ様に生きぬいた彼の時の人達が今なにを想い考えて居るかしらと万感胸にせまるものがあります。平和な時代に生れた孫達は有り難みを忘れて居ります。此の平和な緑の大地を永久に枯らす事なく、孫達、若者に託し守って行ってほしいと心から祈らずにいられません。

終

暗き世を生ながらえて
十五夜の縁に座りて孫達に
平和の幸を語り聞かしぬ

